

山陽放送株式会社 認定特定非営利活動法人アムダ共同事業

ネパール報道関係者、災害におけるメディアの役割
研修報告書

ネパール民放テレビ局 イメージチャンネル
来日研修者 制作部長 **Anupa Shrestha** (アヌパ シュレスタ)
レポーター **Thakur Belbase** (タクルー ベルバセ)
チーフカメラマン **Nabin Shrestha** (ナビン シュレスタ)

AMDA 日本国内事業担当 アルチャナ シュレシュタ ジョシ



* 研修背景

2015年4月25日、M7.8の地震がネパールを襲いました。子どもを含む9000人の命が失われ、23000人以上が負傷。ネパールで80年ぶりとなる大地震は、災害時の対応や防災対策の不十分さ、防災知識や備蓄の不足を浮き彫りにしました。ネパールメディアも同様に最善は尽くしたものの、災害に対する十分な備えはありませんでした。当時、緊急救援のためにネパールへ入っていたアムダグループの菅波代表へのインタビューがきっかけとなり、山陽放送株式会社様とアムダのご支援により、我がimage channel社は防災先進国といわれる日本での研修の機会を得ました。これはネパールにおける災害時の報道の役割を考える大きなきっかけとなりました。

* 研修目的

1. 自然災害時に日本でどのような報道がされているか学ぶ
2. 阪神大震災や東日本大震災の被災地を取材し、災害時の報道の在り方や防災について学ぶ
3. 研修・災害に関するテレビ番組を制作し、ネパール国民に知識啓発の機会とする
4. 日本の災害地の復興の現状知り伝えることで、ネパール国民への希望につなげるとともにネパール政府に働きかける

* 活動内容

1. 震災被災地の訪問・取材（神戸・岩手）
2. テレビ局訪問・見学・取材（大阪・岩手・岡山）
3. 防災研修（岡山・神戸）
4. ボランティア取材（岡山）

* 研修内容

2015年11月16日(第1日目) 大阪 毎日放送訪問

8時30分、関西空港に到着。初めての日本で、ネパール人のAMDAスタッフが出迎えてくれたことに安心した。ご支援、ご協力を頂いている山陽放送の方と打ち合わせの後、毎日放送へ。

【大阪毎日放送局】

ここで阪神淡路大震災のビデオを見て当時の現状を把握した。この地震をきっかけに日本全国の放送局の防災認識が変わったことを知った。災害時に記者が自分を守るために持参するキットや社内で災害に備えて備蓄している食料品などを見ることができた。

研修を開始して新鮮だったのは日本人の時間への感覚の正確さである。我々も電車に乗り遅れない、時間に遅れない、荷物を忘れないなど、時間に気を配った。また、毎日放送の自然災害時の報道準備には、大変感銘を受けた。平時から、迅速な報道のために緊急速報用の原稿が用意されていること、緊急取材の役割分担が決まっていることなど具体的な内容を学ぶことができた。ネパールではこのような準備はされていないため、帰国後まず取り組むべき課題であると感じた。



毎日新聞社 公益財団法人毎日新聞大阪社会事業団訪問

アムダ理事長と共に毎日新聞大阪社会事業団を訪問。

【毎日新聞社 公益財団法人毎日新聞大阪社会事業団】

毎日新聞の世界の子供救済キャンペーンの一環としてネパールの記事を連続して記載されていたことに感動した。毎日新聞は視覚障害者用の新聞を発行していて、社内の廊下や仕事場に視覚障害を持つスタッフ用の点字ブロックがあり、スタッフへの心配りや配慮が行届いていた。

2015年11月17日(第2日目)

岩手県 大槌町訪問

大阪から東日本大震災の被災地の一つである岩手に移動した。岩手県大槌町では、震災後5年近くもなるのに、まだその被害のあとは生々しいものだった。

—取材内容—

【岩手県大槌町】

岩手放送局釜石在住記者



震災当時、津波の悲惨な映像を撮り続けた岩手放送釜石支社の木下記者を取材した。強大な津波が一瞬にして自分が生まれ育った町を飲み込んでしまった時も、カメラマンとしてずっと撮影し続けたという話を伺いそのプロ意識に感銘するとともに、ネパールでの震災を思い出してつらくもなった。自然災害は私たちの心に傷を残すことを強く感じるとともに、メディアに関わる者としても災害時に多くの人々を救う責任があると感じさせてくれた。

【岩手県大槌町】

復興局局長

3.11の大槌の被害状況と緊急支援について話を伺った。さらに復興活動についても聞くことができた。震災が起きて24時間以内に大槌町のすべての避難所にいる避難者に政府からおにぎりを配られたことや家を流された人々に震災から5か月の間に仮設住宅の提供されたことを話してくださった。ネパールは地震から7か月が経つが、未だにテント生活をしている人もいる。日本で学んだことの中からネパール政府に訴えることもたくさんあることに気がついた。

【岩手県大槌町】

臼澤鹿子踊保存会 会長

臼澤鹿子踊保存会会長からは津波で危機的状況に陥る中の避難所の様子を伺った。3.11の時に避難場として臼澤鹿子踊保存会館を7月末まで活用されたことなど話してくれた。一年に一回行われる踊りの練習などでたくさんの方々集まってくる会館では普段からの助け合いの精神が震災の時役に立ったと話をしてくれた。

2015年11月18日(第3日目)

岩手県大槌町

アマダ大槌健康サポートセンター

津波の被害を受けた地域へ訪問した。岩手県大槌町のアマダ大槌健康サポートセンターを訪問し、自らも被災し、アマダで働いている、大久保さんと菅谷さんにセンターの活動を聞いた。運動教室やパン作り教室を通して被災者の心を繋げる努力をしていることを伺った。また、仮設住宅の建物を見学し、中に必要最低限のものは整備されていること、衛生環境に配慮されていることを知った。



【岩手県大槌町】



カメラマンとレポーター、それぞれに印象的な一日となった。カメラマンは実際に撮影を開始、レポーターも被災地、仮設住宅の取材にあたった。現在復興途中であるネパールのことを思いながら、仮設住宅に暮らす被災者や彼らの人生について関心があったからである。大槌健康サポートセンターのスタッフ2名に経験談とともに案内して頂いた。

岩手放送局訪問

【岩手放送局】

岩手放送局の当時のニュース編集部長は、東北大震災の後は1か月ほど放送局に泊まり込んで被災地へのスタッフの手配、番組の放送、スタッフの健康管理などに従事されたとのことであった。報道局が被災者と支援者をつなぐ災害時の重要な存在であることも再認識した。



2015年11月19日(第4日) 兵庫県神戸市訪問

—取材内容—

【阪神淡路大震災記念人と防災未来センター】



阪神淡路大震災発生後20年たった神戸市がどのように復興したか、どのように震災の経験を未来に伝えていっているのかを学んだ。災害に直面した経験のある国の中でも、ここは最大の学習センターのひとつだと思った。震災被害の痛みを伝えること、後世にそれを伝えていくことは、防災教育のための貴重な資料であり、報道に携わる者としての大事な仕事でもあることを学んだ。地震のことを風化させないために、どのように取り組むかを考えさせられる機会となった。

2015年11月20日(第5日目) 岡山市訪問

岡山市西消防署、アムダ本部、山陽放送株式会社を訪問。消防署では講義と実践的な訓練も受けることができた。

【岡山市西消防署】

岡山市西消防署では、岡山市の防災担当職員や消防隊員の方から、消防隊の役割や防災についての取り組みを学んだ。防災の基本は、1)自分で自分の身を守る、2)近所の人たちが助け合う、3)政府や自治体などが支援する、の3つがあり、まずは住民の防災意識を高めることが大切だということがわかった。加えて、自治体を実施する防災訓練や防災教育の対象が子どもたちも含まれていることを知り、小さいころからの関わりが防災意識を高めるために大切であることに気づいた。

ネパールでは、消防署といえば火事になった時にだけ動くものとして認識されており、主要都市にしかない。しかし、日本の消防の国内外での多岐にわたる活動を知り、特別高度救助隊の高度資機材や特殊車両などの説明を受け、日本の最先端技術に感動した。ネパールでは地震で建物の下敷きになった人が、機材の不足から救出が遅れ多くの命が失われた。いつかネパールの消防署もこのような技術を持てるようになればと強く感じた。



【認定非営利活動法人アムダ】

アムダ本部事務局では、長年アムダを支えてくださっているボランティアの方々とお話することができた。阪神淡路大震災をきっかけにボランティアに対する意識が変わったこと、お金や時間を超えて人のために働きたいという人々の気持ちと力を合わせて1995年がボランティアの元年となった話は心に残った。また、アムダがこれまで支援してきたネパールの活動をまとめた分厚い冊子を見て、感銘を受けた。



【山陽放送株式会社】

山陽放送株式会社の原社長からはメディアとしての映像の重要性と共に、災害時に起こり得る停電やアンテナの破損などへの事前対策の必要性を学んだ。情報収集のためにテレビはとても良いメディアであるが、災害の時に役に立つのがラジオであると語ってくださった。災害の時は停電や建物が破壊されればテレビ



局の運営が難しくなる。しかし1キロワットの電波があればラジオ放送が可能で、そのような準備は普段からしておく必要がある。さらに、情報の不足はパニック状況を引き起こすので、可能な限り情報発信することが重要である。発信された情報が100人の人に届けばそれが口コミで広がり人々の不安を軽減できると語ってくださった。ネパールでも今回の震災の際に、ラジオを通じて被災者と直接つながったレポーターは原社長の話に深い感銘を受けた。



また、RSKのニュースの生放送を見学できた。テレビ局では、地震発生に備えて常に防災訓練をしているようであった。ネパールのテレビ局員の訪問に合わせてその訓練をセッティングしていただき、実際の訓練を経験できて、ネパールでもこの訓練を導入できればと考えた。災害時の正確な情報発信は、人々の不安の緩和、根拠のない噂の流布や暴動の防止につながる。ネパールでは普段から停電が多くテレビよりもラジオを聞く人が多いため、ラジオ放送の継続と充実にも力を入れる必要を感じた。

2015年11月21日(第6日目)

岡山市、総社市視察

日本の生活風景と人々を撮影。岡山の町を散策。その後通訳のアルチャナ氏の自宅を訪問し、夕食を共にした。日本人家族とも出会い暖かいもてなしを受けた。日本人が大切にしていることやどのように暮らしているか、体験することができた。

2015年11月22日(第7日目)

岡山県立大学訪問

【岡山県立大学】

先生 2名

大学院生 3名

岡山県立大学で授業に参加し、授業の中でネパールでの震災の経験を共有した。看護学科国際保健特論の演習講義として、12月末にネパールに行く予定の学生にネパールの現状を共有することによって彼らのネパール国の理解度が深まったと思う。



在日ネパール人のお宅訪問

【在日ネパール人】

日本に生まれ育って、現在岡山の高校に通っているネパール人青年に日本の学校で防災教育について話げできた。ネパールの学校での防災訓練や防災教育見直す良い機会になったと思う。彼の父親は日本の淡路大地震を経験していて、震災後の日本がどのような復興をとげてきたか話をしてくれた。

2015年11月23日(第8日目)

帰国の途へ

* 帰国後の活動

1. 研修へ参加したスタッフと、Image channel 社スタッフの交流プログラムの実施

日本で学んだことについて共有する機会を持った。

どのように日本の記者が働いているか、東日本大震災でテレビ、ラジオそれぞれが果たした役割、日本のテレビ局の災害に対する準備や、消防署の様子も紹介した。

参加者: 31名

Image グループ会長、副会長





2. 研修中の取材をもとに地震に関する番組を放映(別途映像添付)
3. 防災教育番組「Samay」、13回シリーズを毎週金曜日に放送している。日本で学んだことを参考にして、教育、メディア、医療、ボランティアなどに関係する方々を招待して、ネパールの防災教育を考える番組である。

今後の予定

1. 震災から9カ月が経過したネパールで、様々な状況を記録に残す
2. 「災害時の報道 (Reporting during Disaster)」として、研修で学んだ内容を書面で残す
3. 学校の保護者、子ども向けの地震に関する教育啓発番組の制作
4. テレビ番組をよりよくするための基金の創設



Image Channel Pvt. Ltd. Image Complex
Panipokhari, Kathmandu, Nepal

謝辞

災害時に日本のメディアがどのように仕事をするのかを現場の臨場感とともに学ぶことができました。被災地の取材では、携行用の健康管理キット、食料品の備蓄が整っていることも知り、記者として自分で自分の身を守りながら取材・撮影をし、報道する大切さ、被災者のことを世界中に発信する使命を改めて実感しました。

今回研修を受けた各放送局では、今後起こるであろうと予測されている地震・津波に備えて、放送局内で毎月防災訓練を行っています。幸いなことに、山陽放送では実際に防災訓練を間近に見学させて頂くことができました。まるで実際に被災したかのような緊張感のある訓練を見て、日頃の訓練がいかに大切かをネパールに伝えたいという強い使命感が湧きました。

この貴重な研修取材を通じて学んだことを、災害時の報道者としての大切な役割と認識し、ネパールにおいても共有し活かしていきたいと思えます。

この機会をご提供いただきました山陽放送株式会社様、アムダ、そして研修にご尽力をいただきました毎日放送、岩手放送、岡山県立大学、岡山市西消防署、その他ご関係の皆様さま方に心より感謝申し上げます。

2015年12月22日